



上智大学創立 100 周年
 上智短期大学創立 40 周年
 上智社会福祉専門学校 50 周年



学園紛争の嵐、その後の改革

No. 13

1. 警察が構内に入ったことで紛争が始まった

1968年6月5日夕刻、5号館（通称SPS、1981年に解体）のクラブハウスにあったワンダーフォーゲル部の部室で盗難があったと部員からの通報があった。守衛が麹町警察署に連絡し、捜査のため警察車両が構内に入り、私服の警察官が捜査を行った。これを見た一部の学生が、警察車が大学に入ったことに抗議して集会を開き、警察車の退出を妨害した。柳瀬睦男副学長が、手続き上の不備があったことを学生に詫言びて、深夜に警察車は構外に出た。

翌日から警察車両立ち入りに対して、「官憲導入反対、大衆団交」などを主張する学生は、全学共闘会議（以下全共闘）を結成して、5号館に泊り込み、巨大な看板を立て、学内をジクザクデモし、またハンストなどを行って、大学に抗議した。そして7月2日未明午前4時頃、多くの一般学生、教職員が反対する中で、覆面をし、ヘルメットを被り、角材を持った全共闘系学生が、1号館に突入、バリケードを築いた。このバリケードは、占拠に反対する学生の要求が高まったため18時間後に自主的に解除され、全共闘は7月5日の代議員会でいったん解散させられた。



大学がバリケード構築の責任者13名を退学または停学処分としたため、全共闘は10月以降ふたたび抗議集会を開く

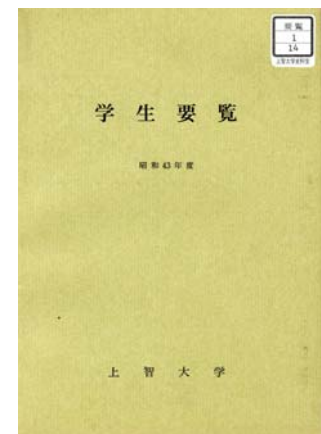
しかし、この大学の処分に反対した学生は、連日、抗議活動を行い、10月18日には代議員会を無視して再度全共闘を結成した。そして、(1)13名の不当処分白紙撤回、(2)官憲導入弾劾、(3)学生要覧の3条項の撤廃（右図参照、この中の「政治活動に関する規則」「集会、パンフレット等配布時に承認印を要するとする規則」「課外活動に顧問を置くという規則」をさす。）(4)学部別自治会の設立の承認、の4項目の要求書を、大学に提出した。これに対し大学は「全共闘は大学の認めた団体ではないので正式な回答はできない」として拒否した。そのため11月7日午後6時過ぎに、およそ180名の全共闘学生がヘルメット、角材で武装し3手に分かれ1・3・4号館に突入しバリケードを築いた。

2. 6ヶ月間の臨時休業の措置をとった

同年11月12日に大泉学長が辞任し、守屋美賀雄理工学部長が学長となった。また学生会長に和泉法夫君が決まった。守屋学長は、学生会長や代議員会議長など学生の協力を得て、大学改革に乗り出した。それまでの学生要



ワンダーフォーゲル部の盗難捜査のため警察の車が5号館前に駐車、大学紛争のきっかけとなった。（1968年6月5日）



この中に学生生活に関する規定が設けられており、学生は3つの項目に関して撤廃を要求した



一般学生を威嚇する全共闘の学生

覧改訂委員会、それを引き継いだ学生の代議員会要覧改正委員会が推し進めてきた学生要覧の改正案が全学生の投票により11月19日に可決した。このことで守屋学長は、学生や全共闘学生が要求していた学生要覧3条項の改定を行い、12月1日から施行すると、11月21日の全学大会で表明した。



機動隊を導入したのは、学生同士の流血を防げると、私の責任で判断したと、守屋学長は語った。

その後、一般学生のバリケード解除の声が高まるなか、和泉学生会長は全共闘に対して「バリケードの自主解除」を勧告し、大学も数回にわたって解除の掲示を出すなどして忠告した。しかし全共闘側は、バリケードを解かず、学生会は12月中旬にバリケードの実力排除を試みたが、全共闘は校舎の屋上から石やアンモニア水を投下するなどで抵抗し、負傷者も出て撤去は成功しなかった。そして新たなバリケード封鎖の可能性もあることから、守屋学長は最後通告として、「旧2号館を封鎖しない」「個人のテロ活動はしない」「器物を破損しない」「他大学の学生は構内に立ち入らない」など

の条件を提示して交渉したが、全共闘は拒否した。そのため学長は、21日午前6時過ぎに機動隊に出勤を要請した。その際ピタウ理事長は機動隊の責任者に「決して学生を傷つけないで欲しい」と要望

した。占拠した学生は投石等を繰り返していたが、機動隊は催涙ガス銃を使用して学生を排除した。その際、退去しなかった男子学生53名が逮捕された。その日、大学は「本日から6カ月間、臨時休業とする」との掲示を出し、大学を閉鎖した。この機動隊導入や全学休業などの処置は、上智方式、上智モデルともいわれ、その後の大学紛争収束のモデルとなった。

3. さまざまな改革が行なわれた

守屋学長は、休業期間中に多くの委員会を組織し改革を検討し、学生の意見を入れることを確約し、改革を行った。主な点は次の通りである。(1) 大学の理念は、従来「本学は教える者と、教えられる者との精神的共同体である」とされていたが、「教員と学生は各々の立場を尊重し…」と、改正された。(2) 全授業時間の3分の2以上欠席した場合は、落第となったが、それを廃止した。また一般教育科目は1.2年次で履修するという制限枠も取り払った。(3) 課外活動では、立て看板の内容、チラシなどすべて学生部(当時)の許可を必要としたが、届出



ロックアウト解除宣言をよるこぶ一般学生

制となり、また顧問を置かなく

ても課外活動団体を設置できるとした。



グラウンドでの全学集会で激しくもみ合う一般学生と全共闘学生

閉鎖中の学内で入学試験も卒業式も行われた。1969年4月7日に入学式も行われた。この入学式の後に全学集会を開催して「大学閉鎖解除し、授業を再開する」ことが、大学と学生会の間で3月31日に合意が成立していた。学生会主催の全学大会が7日午後2時30分から真田堀グラウンドで行われた。グラウンドは一般学生とヘルメットを被った全共闘学生との間で激しいもみ合いとなった(写真上)が、和泉学生会長が大学に対して「ロックアウトの解除

を要望」し、守屋学長が条件付で「閉鎖を解除する」と宣言したことで、1968年12月21日以来、108日間の大学閉鎖が解除された。その後、大学は平静さを取り戻し、上智大学の全共闘運動は、やがて消滅していった。その年の12月18日に、理事会は新しい上智大学の「教育理念」を発表し、その後の大学の教育・研究の方向性が示された。